

1945年～1947年の三鷹と柿岡における黒点観測の比較

○米谷 夏樹¹ 櫻井 隆² (1.国立天文台太陽観測科学プロジェクト 2.国立天文台)

東京大学東京天文台では1938年から1998年までスケッチによる太陽黒点観測を継続してきた。三鷹キャンパスに設置されたカールツァイス製口径20cm屈折赤道儀（焦点距離3590mm、倍率60倍）で、投影板に直径25cmほどの太陽像を映して記録用紙に黒点群を書き写し、黒点相対数、面積、白斑の状態などを記録している。単独の連続観測データとして世界的にも貴重な記録であるが、第二次世界大戦が激化し東京多摩地区も空襲を受ける回数が増えたことで研究環境が悪化、1945年2月8日には三鷹本館が火災に見舞われ、1945年1月26日から2月7日までのスケッチ原本をはじめ貴重な資料の数々を消失している。そうした経緯から黒点観測は柿岡地磁気観測所（茨城県石岡市）に移されて継続された。この史実は東京大学百年史にも書かれているが詳細は不明のままであった。黒点観測の性質上、観測地や観測機器など環境の変化はデータに大きな影響を与えるため、そのままでは連続したデータとして扱うことはできない。

今回の調査では、疎開中も三鷹では別職員により観測が継続されていたことが判明、三鷹版と柿岡版の2つが存在することが予想されたものの、柿岡の記録はあくまで気象台の観測結果であり、天文台としての公式記録は三鷹版であることも判明した。今回の発表では調査の第1報として観測実施日や観測手法の違い、黒点相対数の違いなどに着目して紹介する。